

東京YMCA

2023

4

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

YMCAをかけがえのない場に



2023年度運営方針について

公益財団法人東京YMCA総主事 菅谷 淳

2023年度がスタートしました。ここへ来てようやくコロナを取り巻く環境が大きく変化し始めています。3月よりマスクの着用については個人の選択が尊重されるようになり、5月には感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザと同レベルに引き下げられることとなりました。免疫の減衰や治療薬の問題など不安要素はありますが、確実に収束に向かって進んでいると信じています。

画面越しでは度々顔を合せていたはずなのに、直に人と向き合うと長らく会えていなかったような印象を受けるから不思議です。身振りや表情、その人がまとう空気や熱量など、コミュニケーションとはやはり言葉だけでは成立する訳ではないことが思い出されます。

一方で、オンラインなどからこそ可能となるコミュニケーションがあることも事実です。例えば、海外や遠方にお住いの方、健康上の理由から外出が困難な方、人混みや集会に苦手意識を持つ方もいらっしゃると思います。さまざまな事情を抱える一

2023年度東京YMCA運営方針（抜粋）

東京YMCAは、2022年7月に世界YMCA大会で採択された行動指針「VISION2030」ならびに最終年度を迎える日本YMCA中期計画（3ヵ年）に基づいて2023年度東京YMCAの運営方針を策定する。

アフターコロナ、ウィズコロナの時代、互いを認め合い、高め合う「ポジティブネット」のある豊かな社会を創るため、したい何かがみつき、誰かとつながる、私がよくなるかけがえのない場所としてのYMCAを創出する。

そのためにYMCAに連なる一人ひとりが、心をひらき、わかち合い、前向きで、まわりを惹きつける魅力を持つ人になるように邁進する。

1. ポジティブ・ウェルビーイング（Positive well-being） 「かけがえのない命と健康と幸福のために」

Positive well-beingを提唱することで、かけがえのない命を育み、人びとの健康と幸福を追及する。

2. ユース・エンパワーメント（Youth Empowerment） 「青少年が夢を実現できるYMCAになるように」

若い世代が夢を持ち、自己実現のために参画できるYMCAとなる。

3. テクノロジー フォー ソーシャルインクルージョン アンド ダイバーシティ（Technology for social inclusion & diversity） 「誰も置き去りにしないために」

あらゆる場面でテクノロジーを活用し、多様なオンラインコミュニティのプラットフォームとなる。

4. パートナiership（Partnership） 「既存の枠組や領域を超えてつながるように」

東京YMCAが取り組むべき地域社会の課題を明らかにし、企業や行政、他のNPO、NGOをパートナーとし、さまざまな課題解決に臨む。

5. チェンジ・エージェント（Change Agent） 「YMCAに連なるすべての人が社会の変革者となるように」

未曾有の世界危機において、YMCAに連なる一人ひとりが地域、世界の課題に臨み、Change Agent（変革者）となる。

さて、今年度は、東京YMCAが昨年度より推進してきた事業再編と組織改編に息を吹き込む重要な年となります。そのため、既存の事業やプログラム、活動の一つひとつが、YMCAが目指す理想の地域や社会、世界に対応するものとして存在しているかどうかを地道に検証する必要があります。また、この運動を共に推進する会員と職員を擁護し、若いボランティアを育成し、誰もがYMCAを通じてやりがいや生きがいを感じられるようにすることが求められます。

1.「かけがえのない命と健康と幸福のために」
YMCAの目的は、かけがえのない命を育み、人びとの健康と幸福を追及することです。そのため、地域のニーズに応えて市民活動を活性化させ、互いに認め合い助け合う健全な市民社会作り

2.「青少年が夢を実現できるYMCAになるように」
夢を持ち、社会に貢献したいと願う青少年が東京YMCAに参画し、その資源や拠点を有意義に活用できるように環境を整えます。また若手の会

3.「誰も置き去りにしないために」
あらゆる場面でテクノロジーを活用し、多様なオンラインコミュニティのプラットフォームとなるための取り組みを進めます。具体的には、昨年度に引き続き東京YMCAのすべての拠点に「地域活動コーディネーター」を置いて地域のニーズを調査し、テクノロジーを用いて多様性を包摂するプログラムを企画・開発します。また、デジタル化を進め、オンラ

4.「既存の枠組や領域を超えてつながるように」
企業や行政、他団体と進んで手を携え、共に、これまでの会員制度の枠組を超えて協力者や支援者を組織化し、YMCAのボランティア団体としてのアイデンティティを強化します。そして、私たちが持つ社会的訴求力を前面に出し寄付金や助成金を増強しつつ、公益を目的とするさまざまな機関との連携を「公益協働事業」として位置付け、公益団体ネットワークの構築を目指します。

5.「YMCAに連なるすべての人が社会の変革者となるように」
未曾有の危機に臨み、Change Agent（変革者）となる。度々東京YMCAは邁進

められます。上記を踏まえて今年度は、昨年7月に世界YMCA大会で採択された行動指針「VISION2030」と、最終年度を迎える「日本YMCA中期計画」に基づいて東京YMCAの運営方針を策定しました。以下はその5つの基本方針の骨子になります。

1.「かけがえのない命と健康と幸福のために」
YMCAの目的は、かけがえのない命を育み、人びとの健康と幸福を追及することです。そのため、地域のニーズに応えて市民活動を活性化させ、互いに認め合い助け合う健全な市民社会作り

2.「青少年が夢を実現できるYMCAになるように」
夢を持ち、社会に貢献したいと願う青少年が東京YMCAに参画し、その資源や拠点を有意義に活用できるように環境を整えます。また若手の会

3.「誰も置き去りにしないために」
あらゆる場面でテクノロジーを活用し、多様なオンラインコミュニティのプラットフォームとなるための取り組みを進めます。具体的には、昨年度に引き続き東京YMCAのすべての拠点に「地域活動コーディネーター」を置いて地域のニーズを調査し、テクノロジーを用いて多様性を包摂するプログラムを企画・開発します。また、デジタル化を進め、オンラ

4.「既存の枠組や領域を超えてつながるように」
企業や行政、他団体と進んで手を携え、共に、これまでの会員制度の枠組を超えて協力者や支援者を組織化し、YMCAのボランティア団体としてのアイデンティティを強化します。そして、私たちが持つ社会的訴求力を前面に出し寄付金や助成金を増強しつつ、公益を目的とするさまざまな機関との連携を「公益協働事業」として位置付け、公益団体ネットワークの構築を目指します。

5.「YMCAに連なるすべての人が社会の変革者となるように」
未曾有の危機に臨み、Change Agent（変革者）となる。度々東京YMCAは邁進

赤△三角

「夢があるから、がんばれる」。電車広告を見ていてふと目に留まった言葉です。とある介護施設の広告で、退院後にやり

バングラデシュYMCAを訪ねて

10年ぶり再開!

30余年に渡る交流の歴史のあるバングラデシュYMCAを、2月19日～26日、5人の職員が訪問しました。1990年にパートナーシップを結んで以来、双方のYMCAはワークキャンプやスタディツアーを中心とする人的交流を重ねてきましたが、長らく治安情勢などの影響により現地への訪問は見送られてきました。一昨年、ようやく首都ダッカを含む地域の危険情報レベルが引き下げられたことを受け企画された今回の視察訪問。2013年2月以来、実に10年ぶりの訪問となりました。

参加メンバーは、国際部の松本数実団長ほか、池田麻梨子さん、中元美佳さん、春日広務さん、安田よもぎさんの若手を中心とする5人の職員。主な目的は、支援先であるNFPE（Non Formal Primary Education／働く子どもの学校）の見学や現地の人びととの交流を通して、今後の協働の可能性やプログラムの在り方を検討することでした。海外で実際に見て触れて、さまざまに感じ考えた職員の声をお届けいたします。

(国際・総合教育事業部 松本 数実)



現地YMCAが運営するNFPE7校のうち、2校を訪問。ダハバラのNFPEでは、5～8歳の生徒約30人に対して教師1人が英語・国語・算数の3科目を指導。家事手伝い等の負担とならないように授業は午前中で終了する



インドを源流にした大河のほとりにある洪水被害地域も訪れた。度々洪水に見舞われても、流通の場である川から離れては生活が立ち行かない。近年の季節外れの洪水は深刻な問題



NFPEの卒業生と交流。日本からの来訪者のためにと夜行バスで4、5時間かけて会いにきたという若者も多かった



カルチャーナイトではガロ族の踊りが披露された。そのお返しに『ズンゴロ節』等を紹介し、最後は全員で円になり歌い踊った

「支援」から「協力」へ

中元美佳 (山手センター・野外教育)

バングラデシュYMCAとこれまでの私の唯一の接点は「国際協力募金」でした。支援先の実態に触れてみたいという関心から今回の視察に加わりましたが、現地でNFPE（働く子どもの学校）を運営するスタッフや子どもたち、卒業生などと交流を重ねる中で、ある想いが湧き起こりました。それは、「支援」ではなく「協力」して何かを一緒にやってみようという気持ち。有事の関わりに留まらず、平時のつながりこそ大事にして、お互いがより良くなる協働事業を共に築いていきたいと思うようになりました。



では、どのような協働が可能か。野外教育に携わる自分自身の立場から考えたとき、やはり「キャンプ」は一つの有効な手法だと感じています。これを活かしたYMCAならではのワークキャンプやスタディツアーを現地の人と協力して形にしていきたい。その際、保育や専門学校、ウエルネスなど、東京YMCAの他の事業部の仲間と意見を出し合い、それぞれの強みやアイデアを組み合わせることで、豊かな活動を生み出せると思っています。

まずは行ってみよう

春日広務 (社会体育・保育専門学校)

ダッカの空港に到着後、街に出てまず驚かされたのは真夜中であるにも関わらず子どもからお年寄りまでが当たり前のように活動していたこと。人の声や生活音、車のクラクションなどが絶え間なく鳴り響き、なんてエネルギッシュな場所なのだろうと感じました。帰国後すぐに新宿の中心地に行く機会がありましたが、バングラデシュのにぎやかさを数日間経験した後ではどこか物足りなく感じられたので不思議です。街も道路も整備され、整然とした印象の日本とは異なる魅力のある国だったと今、改めて思い返しています。



「どんなことを学んでいるの?」という質問に対して「政治学」と答える若者が多かったことも印象的でした。さまざまな面で発展途上にあると言われるバングラデシュでは、政治がより切実な問題として日々の生活を左右することが背景にあるのでしょう。日本では、政治などに関心を持たなくてもさほど困らずに生涯を過ごすことができますが、果たしてそれは喜ぶべきことなのかと考えさせられました。

言葉が分からなくても通じ合えるし、笑い合えることを実感できたことも大きな収穫です。実際に行き触れてみて、広がる世界があることを知りました。身近な学生たちにも、どんどん外に出て価値観が揺さぶられる体験をしてほしいと思っています。

ホンモノの関係を

安田よもぎ (芝浦学童クラブ)

私たちが募金によって支えているバングラデシュの子どもたちが実際にNFPEに通って学んでいる姿を目の当たりにして、「このために続けてきた、そしてこれからも続けていくんだ」とようやく腑に落ちたように感じました。まさに「百聞は一見にしかず」です。



NFPEの卒業生との交流は、特に印象に残りました。いろいろな話をする中で、彼らが今、ナースや教師などの具体的な夢を持っていること、つまりNFPEが人生の確かなステップとなっていることを知りました。将来の選択肢を広げる学びの場としてNFPEがきちんと機能している実感が持てたことは、私にとって大きな喜びであり収穫でした。

言葉の壁はもちろんありましたが、それを越えた関わりができたと感じています。例えば、ホームステイやカルチャーナイトでは、言葉によらず歌や踊り、美味しい食事を楽しみながら「また会いたい」と心から思える関係性を築くことができました。気付けばバングラデシュという国をもっと知りたい、関わりたいという興味を抱くようになっていました。国を超えた協働や協調の可能性も、このような体験を背景に生まれることを知り、一人でも多くの人に同じような機会を提供したいと強く思われました。

これからも草の根運動

池田麻梨子 (語学教育)

バングラデシュYMCAが近年特に力を入れて取り組んでいることは、将来を担うユースの育成です。メンタルヘルスやリーダーシップ、チームビルディング、地球市民教育、災害支援ボランティア等、多彩なテーマで研修やセミナーを定期的に開催し、昨年9月には60人規模のユースキャンプも実施したとのこと。「ユースがいれば、ユースが元気なら、そこは持続可能になる」。現地で出会ったスタッフが口々に話していました。



1975年には26%だった識字率も現在では65%以上に上昇し、国にも人びとも勢いを感じました。一方で、近年では気候変動による異常気象で季節外れの洪水被害が増えていることや、ミャンマーからの難民の流入により国の人口密度がさらに高まるなどの社会課題も抱えています。こうした課題にどう向き合っていくのか、今後もバングラデシュYMCAの活動を見守り支える、良きパートナーでありたいと思います。

私が現地で感動したことは、行く先々で温かい歓迎ともてなしを受けたこと。訪問中に幾度も催された歓迎会では、バングラデシュを語り、日本を語り、YMCAを語り、社会課題について一緒に考える好機となりました。長年のパートナーシップが育んできた民間外交の力を感じると共に、これもまた平和を創り出す過程であることに気付かされました。

■libyチャリティーコンサートに83人参加

不登校・ひきこもりなど生きづらさを抱える青少年の居場所「liby」を支援するため、「第24回libyチャリティーコンサート」が3月11日、在日本韓国YMCAスペースYにて開催されました。コロナ禍にあっても会場規模を縮小しオンライン配信を行うなど、工夫を重ね毎年継続してきた当コンサート。今年は3年ぶりに大きなコンサートホールでの開催となり、80人を超える来場者に生演奏をお届けすることができました。

「越智光輝と愉快な仲間たち」によるクラリネット・ピアノ・チェロの三重奏に加え、「三菱商事コーラス同好会」による生合唱はいずれも大好評で、大阪や山梨など遠方から足を運ばれた方々にもお楽しみいただきました。三菱商事株式会社、東京たんぼぼYサービスクラブ、ユースボランティアリーダーなど、多く

の方のご協力と笑顔に支えられ、今年も温かな雰囲気の中で開催できたことに心から感謝いたします。益金とご寄付を合わせた788,100円は、より良い居場所作りのために大切に使いさせていただきます。

(オープンスペースliby 高橋 一浩)



■東日本大震災記念講演会「3.11を忘れない」

東日本大震災からちょうど12年目の3月11日、東陽町コミュニティーセンターでは「3.11を忘れない～いのちを考える」をテーマに講演会を開催。会場とオンライン合わせて63人の参加者で祈りと学びの時をもちました。

講師は、震災当時仙台の港町閑上地区にお住まいだった東京YMCA元職員の木島上さん。津波到来寸前に内陸部へ避難し一命をとりとめたものの、自宅を流され、気仙沼や陸前高田市在住の親族5人が命を失くすなど、生々しい被災の体験を丁寧に言葉を選びながら分かち合っていました。自分の身は自分で守り「とにかく逃げて！」そして、一刻を争うそのための「備えを、今」という力強いメッセージに、参加者は胸を打たれました。映像や音楽、詩の朗読などを交えながらあっという間に一時間半が過ぎ、14時46分には皆で黙祷し心を一つにしました。

時とともに風化が進む過去の出来事を思い起こすことで、いのちの大切さを再認識し明日を生きる力を得る講演会となりました。

(東陽町コミュニティーセンター 沖 利柯)



西東京センターで行っていた放課後等デイサービス、障がい児者の活動を昨年3月で終了したことに伴い、西東京エリアでの新たな活動の可能性を探ってきました。会員の皆さんで構成するサポートチームと意見交換を重ね、職員の方々とタスクチームを中心に様々なアイデアを出し合い検討してきました。そこで描いた新たな活動のコンセプトは「居場所と学び・体験を必要とする子どもたちへの支援」。例えば、学習支援、外国に

ルーツを持つ子どもへの日本語支援など、必要な機会や場を十分に得られない子どもたちを支える取り組みをイメージしています。この取り組みへの検討は、児童館やアフタースクールのある地域センターの居場所事業

のような会費や賛助会費からの支援はもちろん、新たな企業や個人からの支援と助成金の獲得、そしてボランティアの確保も必要です。幸い、この地域には西東京センターや医療福祉専門学校によって築かれてきた地域の信頼や大勢の支援者という大きなリソースがあります。これらを最大限に活かすことに加え、先行事例を持つ近隣の団体、

「居場所」をキーワードにして生まれる支援や人の「つながり」が新たなコミュニケーションを創造していくことを思い描きながら、ぜひ一人でも多くの方にこの取り組みを応援していただきたいと願っています。事業立ち上げの進捗は、あらため

(副総主事 星野太郎)

西東京エリアでの新たな活動展開を探る



196人が応募 多彩な生き方を表現

「豊かな福祉社会を創るために」をテーマとして毎年、全国からエッセイを公募する「愛恵エッセイ賞」。今年も公益財団法人愛恵福祉支援財団との共催で実施し、11月までに学生、一般、専門職

などから合計196の作品が寄せられました。今年のサプテーマは「断絶を乗り越えて」。また、今年から学生や一般、福祉関係専門職の3部門に加えて、新たに外国籍の部が設けられまし

た。東京YMCAからは、医療福祉専門学校生の申 林さんの作品『コロナ禍での心理的な成長』が、新設された外国籍の部で最優秀賞を受賞。夢を叶えるために来日し、不安に押しつぶされそうなどの中でも自立的な生活を築き、目標を明確にすることで強くなったと自身の経験を綴った申さん。「困難な時代にあるからこそ精神的

な成長の機会を得た」という力強いメッセージが審査員の心を動かしました。表彰式は3月4日に愛恵ビルの会場とオンラインで開催され、受賞者と関係者24人が集いました。受賞作品は冊子にまとめられ、関係機関へ配布されています。ご覧になりたい方は会員部へご連絡ください。(Tel.03-6278-9071)



YMCA正章



日本のYMCAのブランドロゴ「ポジティブY」

シリーズ 資料室の窓から<118>

<時>は 事業の進展を阻んだが

本会元副総主事 齊藤 實

嘗て東京YMCAの働きを大きく阻んだ事態三つ。先ずは関東大震災。次はアジア太平洋戦争での国家総動員体制。三つ目は、今は収束の兆しを見せている新型コロナウィルスによる閉塞感である。関東大震災では神田美土代町の赤レンガ造りの壮麗な講堂と会館とを失った。創立以来創り続けた貴重な事業記録が焼け失せた。《人物》の喪失であった。然し、罹災後7年目に復興新築した第二代会館では、講堂での大規模集会主義から、少ない人数によるクラブ活動・グループ活動に転換して、会員が望むとおりの諸活動が展開された。1930年40年代の東京YMCAは、オーケストラや複数の合唱団を持ち、キリスト教信仰の発露として

の何かが阻まれ変えさせられたのである。この時期失われたもの、それは活用すべき《時》ではなかったか。コロナ禍収束後の「いつの間にか」ではなく、立ち直りの手立てを長く記憶すべき記念日を決めよう。私どもの再出発の志を共有する記念日を決めよう。

接収した。その頃の千代田区富士見町での借館時代は、私の会員時代の天地であり、職員になった記念すべき時期である。接収解除後は、盛大に《人》が戻り、会員活動が賑わいを見せた。そして今。コロナ禍は、人びとの三密を拒んだ。YMCAがいのちとする出会いと集会・交わりが禁じられて3年余。東京YMCAが体験したことのない「密接禁止」措置で、東京YMCA

2023年度 主な会員活動 (予定)

4月/11月	ベタベタの会 (西東京ウォーキング)
5月27日	会員大会
6月10日/10月予定	神田川船の会
8月予定	会員芸術祭
8月/3月	平和のパネル展
9月	災害スタディ
9月予定	国際協力街頭募金
9月23日	インターナショナル・チャリティーラン
10~12月	各センターバザー
11月	江戸城ファミリーウォーク
11月予定	ソシアス2023 (会員協議会)
1月予定	子育て講演会
2月28日	ピンクシャツデー
3月	東日本大震災復興支援イベント



*詳細は随時ホームページでお知らせいたします。
<https://tokyo.ymca.or.jp/community/>

【月例プログラム】

- 早天祈祷会/毎月1日 (原則)
- WHO (ウォーキング・ホリデー・荻窪) /月1回
- 歌の広場/各地で月1回程度開催
- ニューススポーツ/第3木曜日
- フードパントリー/年2~4回予定

- 音訳ボランティア「シジュウカラ」/第1・3水曜日
- 下町こどもダイニング/第3月曜日
- おもちゃ病院/第4木曜日
- にじいろ にほんご広場/月1、2回月曜日
- クリーンウォーク/第2金曜日